

多様な人材育成に関する万国津梁会議（第2回） 議事録

日 時：2020年9月7日（月）15：00～17：00（オンラインにて開催）

出席者：13名（委員10名、事務局3名）

【委員】宮平栄治委員長、平良一恵副委員長、有木真理委員、鯨本あつこ委員、伊良皆和弘委員、嘉数道彦委員、喜屋武裕江委員、金城伊智子委員、小島肇委員、山崎暁委員（10名）

【事務局】上江洲、樋口、親泊

事務局：これより、多様な人材育成に関する万国津梁会議の第2回会議を始めたいと思います。本会議ですが、基本的にオープンな形で開催しております。今回も報道機関の皆様へ公開する形で開催しておりますので、予（あらかじめ）め御了承の程、よろしくお願いいたします。

それでは、お手元の会次第に沿って進めていきたいと思います。まず始めに、開会の挨拶を委員長の宮平栄治様によりしくお願いいたします。

<開会挨拶>

宮平委員長：委員の皆さん、こんにちは。名桜大学の宮平でございます。お忙しい中、また台風10号の余波がある中、御参加いただきありがとうございます。皆様の地元とか、あるいは御自宅の被害等はなかったでしょうか。鯨本さんは今どちらにお住まいなのですか。

鯨本委員：大分県ですけれども、大丈夫です。

宮平委員長：大丈夫でしたか。今回はちょっと大型でしたから。しかも東シナ海側を通るとどうしても風の巻き込みで風力が強くなる傾向にあったものですから、ちょっと心配していましたが、大丈夫で何よりです。ということで、お忙しい中お集まりいただき、ありがとうございます。前回頂いた資料をいろいろとまとめさせていただきまして、今回もまた叩き台ということで進めさせていただきたいと思います。忌憚のない御発言と、また高所大所からの御意見を賜りたいと存じますのでよろしくお願いいたします。

<報告事項：前回会議の振り返り>

事務局：宮平委員長、ありがとうございます。

（※会議資料 p.1 表示）

それでは早速ですが、まず報告事項ということで、前回の会議の振り返りをさせてい

たきます。その後、前回の会議の振り返りを経て、皆様のほうに御審理いただきたいと思ひます。審議事項に關しましては、進行役を宮平委員長にバトンタッチいたしますので、よろしくお願ひいたします。

(※会議資料 p.2 表示)

前回の会議の振り返りといたしまして、第1回会議における委員の意見の内容を、皆様に御了承いただいた3つの主要テーマごとに現状・課題、それから必要な人材・取組といった項目に大別して整理させていただきました。3つのテーマの間に共通するキーワードといたしましては、コロナ禍による変化への対応ですとか、あるいはITの活用と限界、又は島嶼県ならではの人材育成などが挙げられると理解しております。それぞれをまた、全国的な現状・課題、人材・取組なのか、あるいは沖縄独自のものなのか、そういった点も気になりましたので、整理させていただいております。これらの意見を踏まえて、年末に向けて提言内容を検討していただくわけですが、宮平委員長と相談の結果、意見及びアイデア出しのヒントといたしましてSCAMPER法というフレームワークを活用して再整理もしております。これはまた後ほど、解説したいと思ひます。それを踏まえて、委員の皆様にも本日御議論を賜りたいと考えております。

まず、産業振興を担う人材の育成に關する意見としまして、下に挙げられているものが出ました。全国的な現状・課題としましては、福祉・介護の必要な方の社会進出と介護離職などが挙げられるかと思ひます。これは、福祉・介護の必要な方だけではなく、その福祉・介護を支えている家族や御親族の方とか、それによって少し社会進出を阻害されているところもございしますので、そういったところもひっくるめて、そのような課題があるのではないかという御意見が出されました。その他、沖縄独自の現状・課題といたしましては、伝統文化・芸能を担う人材の育成ですとか、あるいは観客の育成なども必要になってくるのではないか、伝統文化と芸能の継承も現状あるいは課題として挙げられるのではないかという御意見がありました。それから高学歴者の県外への就職・進学等々、こちら、せつかく人材を育てても県外に出ていくという課題があるのではないかという御意見でございました。必要な人材・取組といたしましては短期的に既存業態の変化とか、長期的には人の価値、ITリテラシーの向上とか、高付加価値なものを生み出すことなどが挙げられ、全国的にはこういった課題があるのかなというところから、それから、沖縄独自の必要な人材・取組といたしましては、他県や世界から注目されるくらいのきっかけになるような人材育成が必要になってくるのではないか、ITに頼らない部分を踏まえた伝統文化・芸能振興というのもやはり必要になってくるのではないか、といった諸々の御意見が挙がってきました。

(※会議資料 p.3 表示)

続きまして、学校教育と社会教育の総合的・横断的な取組等の推進に關する意見でございします。幾つか割愛して御報告させていただきます。まず全国的な現状・課題といたしまして、まず学習指導要領の改訂とGIGAスクール構想というものが始まっていると

いうところがあります。それによってオンライン化による平等な教育の可能性が出てきたということがあるかなという反面、IT教育、ITを活用した教育の遅れ、ITリテラシーの格差、地域間の格差、学校間の格差、といった他諸々のものが出ているということです。その他、貧困対策の遅れですとか。ちょっと注目される動きとしては、ビジネスアナリストの台頭と、県民、特に女性との親和性が挙げられるかなと。これはちょっと、沖縄独自のところに挙げてもいいのかなとは思いましたが、全国的なものだと思いますので、こちらに掲載しております。その他、コロナの中でこれまでのキャリア教育、管理教育がちょっと機能不全に陥っているというところ。それと同時に社会人等々の考える力の欠如などが問題視されているということでもございました。沖縄独自の現状・取組といたしまして、地方自治体、市町村による福祉体験、ボランティア体験などを今進めているところということでもございました。それからBPO事業による業務の推進、コールセンターなどが挙げられますが、そういったものと将来的な機械化への代替というものが現状、起こっているというところでもございます。必要な人材・取組といたしましては、そろそろ公教育の在り方を再度検討していく必要があるのではないかと、高齢者や障がい者への理解、高齢者や障がい者を踏まえた社会の在り方の検討、マインドを醸成するということも必要であるとか、ITリテラシー、ビジネスアナリストの育成も必要であるとか、そういった諸々の御意見がたくさん挙がってきました。沖縄県に必要な人材・取組といたしましては、県内にいる人材、必要なニーズの共有と、学校間の連携が必要ではないかというところが挙げられました。それから、全県レベルでのWiFi環境の構築。これは行政的な取組かも分かりませんが、やはりインフラのところで格差が出るとちょっと問題があるということで、こういった御意見が挙がっております。

(※会議資料 p.4 表示)

最後になりますが、地域社会を支える人材の育成に関する御意見といたしまして、全国的な現状・課題として挙げたのが、コロナによるオンライン活用の進行と、貧困問題による地域差が出ているのではないかとということでもございました。WiFi環境とかインフラで差が出てきているというところ。それから沖縄独自の現状・課題としましては離島地域で人材やスキル、ノウハウが少し不足しているというところ、逆に沖縄の優位的なものとして15歳以下の人材が日本一というところが挙げられるのではないかと御意見がありました。それから全国的に必要な人材・取組といたしまして、企業や社会の学校への介入による貧困問題の解決とか、あるいはプロフェッショナルではなくてオールラウンドの人材の輩出というのも、これから必要な取組ではないかという御意見でもございました。それから沖縄県に必要な人材・取組といたしましては、他地域の人材、外の人材との連携、あるいは他県や国に縛られない、沖縄独自の人材育成というものが必要ではないか、といった多数の御意見がございました。取りあえず、報告事項としましては以上でございます。長々となりましたが、こういった形で挙げてきたかなと思っております。

(※会議資料 p.5 表示)

この後、宮平委員長のほうに進行していただきたいと思うのですが、基本的に事務局のほうで今挙がってきた意見を SCAMPER 法という整理の仕方、フレームワークのほうで整理をしております。簡単に解説させていただきますが、SCAMPER 法というのは、以前に流行りました「オズ・ボーンのチェックリスト」というものと大体似たような項目なのですが、10 個ぐらいの項目を更に 7 つ、8 つぐらいに集約したというところですね。基本的には、アイデアを強制的に量産するためのフレームワークとして活用されているもので、検討する際の Substitute とか Adapt とか諸々の頭文字を取って SCAMPER 法と呼ばれているものでございます。皆様に前回挙げていただいた意見をこのそれぞれのカテゴリーの中に、事務局が任意の考えで入れて整理しております。それを基に、この項目はこちらではないかとか、あるいは、この項目に関してはこういった取組が必要ではないかとか、そういった御意見を本日賜われたらと思っております。事務局からの報告としては以上です。この後は宮平委員長のほうにバトンタッチしたいと思っておりますので、よろしく願いいたします。

<審議事項(1)：主要テーマに関する意見交換>

①前回会議の振り返り

宮平委員長：御説明、どうもありがとうございました。いきなり SCAMPER に移る前に、先ほど事務局からお示しいただきました前回会議の振り返りのほうで修正等とか、あるいはちょっと言い足りなかったこととか、これはちょっと削除したほうが良いなという御発言の部分がありましたら、まずその修正から移りたいと思います。

2 ページ目をお示しく下さい。

(※会議資料 p.2 表示)

産業振興を担う人材の育成に関する意見として現状・課題、必要な人材・取組ということで4つのディメンションでやっています。この中で、先生方の意見を織り込んでいきますけれど、他にこういった意見がないかとか、その辺を確認してから進んでいきたいと思っております。産業振興を担う人材の育成に関する意見として、御確認いただきたいのですが、追加事項とか修正事項とかございますか。

鯨本委員：産業振興を担う人材の育成に関する意見ですが、ここに並んでいる課題の高学歴者の県外就職・進学は、一方の見方として、その後帰ってくれば良いという意味で、良しとされるようなこともあります。それは、この後の議論でお話するような形でいいですか。

宮平委員長：ここも、SCAMPER の中のどこに置くかによっても変わってくると思うのですが、そういった形で出てきた内容を自由に置き換えていって、こんな考え方もあるのじゃないかとか、こういうふうな具体例があって結びつけると面白いとか、そういった形でくっつけたり離したり、あるいはまた他のものとくっつけたりして解決策を考えていこうかなということなのです。その後、先生方から頂いた内容を、今度は時間軸であったり、その辺をまた事務局と私と県あるいは副委員長のほうでまとめてお示ししながら解決策あるいは方策などを提案できればと思っています。ですから、なるべく御自由にどんどん仰っていただいて、考え方を強制的に出しながら、後でまた集約していくという方向を考えております。

鯨本委員：分かりました。それでしたら、高学歴者については後の議論で良いですが、伝統文化・芸能が項目として産業振興に入っている点は、産業として振興し継承すべき伝統文化を指しているという意味でいいですか。

宮平委員長：この発言をいただいた嘉数さん、お願い致します。

嘉数委員：産業振興と文化芸能というのが、どこまで噛み合うかというのは非常に大きな問題かなと思います。私が指しているのは、正直申して、産業として成り立っている文化芸能というよりは継承的な視点からみた伝統文化・芸能を担う人材というふうに捉えて、前は発言したつもりでいました。

宮平委員長：例えば、シェークスピアが劇なんか演っていて、ストラトフォード・アポン・エイボンなんて、最初の頃なんか2か年で2万人ぐらいしか来なかったのが、芸術とかその辺で1年間に200万人来たりとか、一大産業化している例も。これが正に、これからやろうと思っている議論なのですね。そういった例もありますので、もしかしてこれは文化、産業振興を担う人材という意味での基礎的な部分なのかもしれないという意味で理解してもいいのかな、そういった議論をやっていければいいかなと思っています。

鯨本委員：分かりました。場合によって、文化芸能は地域人材に入るのかなとも思っていました。元々、伝統芸能というのは地域で育まれてきたものですので、どこに入るのかなというところで。

宮平委員長：あるいは、両方であってもいいわけですね。

鯨本委員：そうですね。

宮平委員長：今のような形で自由に出し入れして、御発言なさった先生に「こんな考え方もあっていいのではないですか」とか言いながら、やっていきたいなと思っています。他の先生方、よろしいでしょうか。大体、今、鯨本さんと嘉数さんと私の中でやり取りしましたけれど、こういった形でやりたいと思っています。

平良副委員長：はい、大丈夫です。お願いいたします。

宮平委員長：では、ここの産業振興は後でまた振り返って変えてもよろしいので、次、取りあえず見てみましょう。次の3ページ目、お願いします。

(※会議資料 p.3 表示)

ここは非常に多いですね。学校教育と社会教育の総合的・断続的な取組等の推進に関する意見です。この中で漏れとか、あるいは先ほどの御議論のように、こちらはここではなくて全国的なもの、あるいは沖縄的なものではないだろうかというような御議論、御指摘、お考えがありましたらよろしくお願いします。

伊良皆委員：私が発言したものが、沖縄独自の現状・課題のほうに「地方自治体による福祉体験・ボランティア体験」とありますが、もし変えることができるのであれば、「学校と地域が連携した福祉体験・ボランティア体験」と書き換えていただいて、これは沖縄に限った現状・課題ではなく全国的にも課題になっていることですので、上の全国的なほうに移していただけるといいかなと思います。御検討お願いします。

(※会議資料 p.3 修正)

宮平委員長：ありがとうございます。こういった形で、仰っていただいたものを見える形に変えていったりして、やっていきたいと思います。他に、どうでしょうか。

平良副委員長：全国的な現状・課題の中で、「ビジネスアナリストの台頭と、県民との親和性」というところは、前回私の発言になっているのですが、どちらかという、ビジネスアナリストという職種が台頭しているというほど、日本にはまだ普及していないという認識でございまして、国際的にはビジネスアナリストのニーズが急増しているのですが、ちょっと台頭というところまでは、まだ日本のほうには及んでいないという印象でございまして、ですので、ちょっとこの表現が変更できたらなと思っております。

(※会議資料 p.3 修正)

宮平委員長：この部分、県民との親和性だとすると沖縄の強みに生かれますよね。

平良副委員長：そうですね。ここは非常に女性が強い職種だと海外でも認識されておりますので、この親和性は特に沖縄県の女性に関しては、未だに親和性は高いと考えております。

宮平委員長：そうすると、課題というよりも可能性。ここ2ページの独自の現状・課題を、課題ではなく可能性・課題として、この「ビジネスアナリストのニーズが表面化しつつある、県民との親和性」をここにコピーしていただければどうかと。全国的なところにも入れていてください。

(※会議資料 p.3 修正)

そうすると、沖縄がトップリーダーになれる1つの部分がここら辺にあるのかなという位置づけが見えてくるかと思えます。平良さん、こういった形でいかがですか。

平良副委員長：はい、ありがとうございます。結構です。

宮平委員長：ありがとうございました。他に御指摘の点がございましたら、よろしくお願ひします。よろしいでしょうか。では、次へ移りましょうか。

(※会議資料 p.4 表示)

地域社会を支える人材の育成に関する意見ということで、こういう意見が出ております。学校教育に比べるとちょっと少ないので、他に、もう少し何かが出てくるかなという期待がありますが、いかがでございましょうか。

鯨本委員：この「離島地域の人材やスキル、ノウハウの不足」では具体的なことがありまして、全国的な問題として「貧困問題による地域差（WiFi 環境等）」と書かれていますが、そもそも地域社会や人口規模が本当に小さい離島地域に行きますと、基本的なITスキルがない方が結構いらっしゃいます。例えば今、沖縄県では離島テレワーク育成交流事業をされていますが、基本的なパソコンスキルがある方を前提とした事業になっているかと思えます。実際は、第一次産業に携わっている方で、第一次産業でお忙しくされていたりするとパソコンスキルを学ぶ機会を持たないまま、ずっと過ごされている方もいます。今、コロナ禍で慌ててパソコン、ITを使って何かということを考えられても、そもそもパソコンスキルがないので困っている方がいらっしゃると、離島地域の住民から伺っています。ですので、基本的なパソコンやITのスキルを習得する必要があるという部分も、どこかに記載できるといいかなと思っております。

宮平委員長：私もちょっと触れたかと思うのですが、例えば連絡網とかその辺がてんでバラバラ。WiFi 環境などこの辺も、沖縄県の場合は特に必要なかなと思ったりもします。一例でいうと、竹富町で地域興しをした場合に、9の有人の島があつて会議をや

ろうとしてもできないわけです。そうするとオンラインでやらないといけないのですけれど、オンラインでやるにしてもスキルもないし、ハード面も整備されていない。もう1つは、離島が故に、例えば故障したときのメンテはどうするかとか、あるいは修理とか保守点検管理とか、こういったところがままならないという状況もあって。これも例えば、鯨本さんが仰っているようなIT環境プラス離島以外のマーケットとの連絡とか、その辺もどうするのだというようなことが結構あると思いますので、この辺も沖縄独自の課題なのかなと。ハード面そしてソフト面、そういったものを入れていったほうがいいのかなと思ったりします。いかがですか、鯨本さん。

鯨本委員：連絡という意味でいえば、地域人材はその地域の産業振興にもくつつくのですが、例えば、離島地域で産業振興をしたり、あるいは地域社会を維持するためのインフラを独自に整備しようというときには、都市部の企業や人材などとの連携が必要になってきます。その場合、多様な人材とネットワークを構築する方法というか、人との繋がり方やコミュニケーションスキルなど、産業振興や地域づくりに必要なネットワークをつくる支援方法もあってほしいなと思います。

宮平委員長：そうですね。社会関係人材とか、最近いろいろな言い方をしていますけれど、島には限られていますので、これがないとどうしても。そういったことを考えないといけないと思います。はい。よろしいでしょうか。こういう形で、今、大体行いましたけれども、他に今振り返って見て、まだちょっと言い足りないなとか。

山崎委員：この地域社会というところで前回お話したか、ちょっと私の記憶があれなのですが。地域社会を支える人材をつくっていくというところで、先ほど高学歴人材の県外流出みたいなことも書いてあったと思うのですが、人材が流出するときって2つのパターンが僕はあると思っていて、地域や大人、地域社会とかを見限って出てってしまう若年層と、逆に若年期に地域でしっかりお世話を受けた上で1回出て、またその恩を持って帰ってくるとか、帰ってこなかったとしても間接的に地域に対して還元していく思いをずっと持ち続ける人材と、この2つに分かれるかなと思っています。なので、課題としては、学校と地域社会はなるべく融合して、もっと意志を持って活動しているような地域社会の大人と、若年期、なるべく早いうちに会うということが大事で、それによって、外に出ても僕は全然いいと思っているのですが、外に出るときの選択肢にマインドセットが変わってくるという、そこを何かできればいいなと思っています。すみません、前回言っていたらごめんなさい。

宮平委員長：例えば、私の経験ですみませんけれど、本学は、半分は県外の学生が来るのです。それで、県外の学生に「君たち、戻るの」と聞いたら、戻らないと言うので

す。どうしてかと聞くと、とにかくお葬式のときが大変だと。あの人はこう言うし、別の人はこういう言うしと。要するにマインドセットが壊れてしまっているわけですよ。今先生が仰っているのは、そういうふうな、戻りたいと思うような環境づくりということですよ。社会コミュニケーションとか取りながら。

山崎委員：そうですね。優秀な人を育てたとしても、育てれば育てるほど外に目がいつてしまうので。例えば、僕の事業は協賛企業さんのプログラムでやっている事業なのですけれど、外に出ていく人材をつくるのに、何でうちが協賛するのだという話をされるのです。僕はそこの企業の社長に、変わるのはどちらでしたっけというお話をさせていただいているのですね、恐れ多くも。例えば沖縄に Google があつたら優秀な人は絶対そこで働くという選択肢ができるじゃないですか。だから、地域社会が魅力的に変わっていかないと。それを若いうちに早く知るということも大事ななと。両方、育っていかないといけないのですけれど。その環境づくりをしたいということです。特に県外から沖縄ってすごく魅力的な地域だと思っているので、その魅力をもっと若いうちに知るということも大事なのではないかなと思っています。

宮平委員長：それは、若い人ばかりではなくて、やはり地域に関連する人達（たち）が認識して意識的に育てるとというのが重要だということですよ。

山崎委員：そうですね。

宮平委員長：鯨本さん、今の御発言に対していかがですか。

鯨本委員：非常にその通りだと思います。実際、地域社会では高等教育機関がない場合は地域外に出ざるを得ないので、出ること自体を悪いと思っている人というのはすごく少ないです。逆に、優秀であればあるほど外に出て行って、成長して帰ってきてほしいということ、皆さん仰っています。例えば鹿児島県の長島町では、ぶり奨学プログラムという奨学金制度つくっています。進学先でぶりのように成長した後には島へ帰ってきたら、町が奨学ローンの返済を補填するという制度です。そういった子どもたちが島に帰りやすい制度とともに、先ほど、山崎さんが仰ったように、小さい頃から、地域社会で活躍している方との接点を作るということは非常に大事だと思います。

宮平委員長：どうもありがとうございます。ぶりは、いわゆる出世魚ですね。なるほど、分かりました。ありがとうございます。今のように、いろいろな先生方からの御発言で触発されて、こんなことを言ってもいいのではないか、こんな考え方もあるのじゃないか、というのが多分出てくると思うのですけれど。他にももう少し言い足りないところ、

付け加えたいこと、アイデアがありましたらお願い致します。

有木委員：2ページの「高学歴者の県外就職・進学」って（※会議資料 p.2 表示）、山崎さんのお話を聞いていて思ったのですけれど、これって沖縄に限る課題ではなく、地方、恐らく全国そうなのではないかなと改めて感じました。私も実は広島福山市鞆の浦という小さな入り江で育っているのですけれど、19歳から帰っていないです。ただ、必ずしも先ほど山崎さんが仰っていたように、出て行くことが悪いわけでは決してなく、生まれ育った地域にどう貢献していくかということとか、将来的に帰ってくるという、その辺の観点がすごく大事なのかなと改めて感じました。地域社会を支えるという観点でいきますと（※会議資料 p.4 表示）、いろいろな制度のお話ですとか、インフラ等の仕組みのお話が出ていたかと思うのですが、もう1つやはり風土というか、考え方の部分とか、その辺をどう植え付けていくか、そこが非常に重要だなと思っています。私は移住者なので、すごく思うのですけれど、沖縄の方って本当にすごく地域を大事にされていて、すごく魅力的な場所である一方、新しいものを受け入れるとか、変化していくということに対して、なかなか受け入れ難いようなところがあるなというのはい部感じているところもあります。もっと若いうちから外を知っていくとか、そういう風土づくりというのが必要なのかもしれないなというのはい改めて感じています。

宮平委員長：変化に対する受容と寛容と。何か、そういったものですよ、仰りたいのは。

有木委員：はい。

宮平委員長：変化を最初から拒否するのではなくて、何だろうというような興味、関心を持って調べるであるとか、受け入れるであるとか、そういったマインド、素質、そういうものが必要だというようなことになりますかね。

有木委員：はい。

宮平委員長：ここは、今ちょっと仮置きにしておりますので、どんどん変えていながらやりたいと思います。今のようない話が、実は SCAMPER の中に入り込んでいます。こういう形で、このアイデアに対して、これとこれをくっつけたらどうなのか、こちらとこちらはもっと拡大したらどうなのか、というのが実は SCAMPER になっています。今のようない雰囲気です。今のような雰囲気です。

（※会議資料 p.5 表示）

②SCAMPERによるアイデア出しー産業振興を担う人材の育成

続いて SCAMPER について。こちらにありますように、代替するというのは、他のもので代替したらどうなるのか。例えば、変化を受け入れるものについて、こういうふうなもので代用してみたらうまくいくのじゃないか、といったことです。例えば先ほど鯨本さんから話がありました、ぶりの奨学金みたいな具体的な例がありますよとか、それを応用してみたらどうですか、代替してみたらどうですかとか。あるいは、こちらにありますように組合せですね。これは山崎さんと鯨本さんの中で、前回ちょっと私が触れましたけれど、多様な考え方を持つというのは、離島とか、その辺とか向いているのじゃないか、組合せになるわけですね。あるいは、Adapt 応用できないかということで、例えば芸能の一部なんかこの辺で応用できないかとか、変えてみるにはどうすればいいかとか、形を変える、色を変える、いろいろなものの見方を変えてみてはどうか。単に転用できないか。他の使っているもの。最近、横倒しというのがよく言われています。特に貧困問題です。貧困問題で、老人福祉であったり、障がい者福祉であったり、そういった制度はもうあるので、そういったものを貧困問題に横倒しできないかとか。そういったことですね。また、取り除いてみるためにはどうすればいいか、余計な部分を削いでみてスリムな形にできないか。こちらは、逆転、再編集できないか。「押しても駄目なら引いてみな」という形で、逆の方向から見てみるとどうなるかとか。そういうふうにやってみていいのかなと思ったりします。

あと、もう1点はテーマ。こちらは産業振興を担う人材の育成に関する意見なのですが、それに囚われずに他のところからくっつけてもいいですし、応用してもよろしいですし、いろいろな見方があると思います。そういったところで、ちょっと強制的に洗い出しをやってみて、その後、頂いたアイデアを更にこちらの方で少し再編いたしまして、先生方にお示しして解決策のほうに導いていきたいと思っております。イメージ的にいうと、先ほどの議論でいいかなと思っております。よろしいでしょうか。

(※会議資料 p.6 表示)

まず産業振興を担う人材、これは仮置きです。一応、私と事務局のほうで、こういうふうにはまず仮置きしています。ちょっとこれは違うのじゃないか、というのがありましたら、移動させて、あるいは両方に置いても結構です。まずは、意見交換の中で配置について御覧になっていただいて、先ほどの高学歴者の県外就職、Adapt「応用できないか」のところに置いていますけれど、これを応用できないか。有木さんが仰っていたような、関係人材をつくる、あるいはマインドをつくっていくというところではここに仮置きしているような状況です。こういうところに置いておいて、その根拠や具体的な例があれば仰っていただいて、それをどんどん可視化していきたいと思っております。こちらのほうから意見交換を行いたいと思っておりますので、どうぞ御自由に御発言いただきたいと思っております。よろしくお願いいたします。

平良副委員長：では、平良のほうから1つ、発言をさせていただきたいと思います。どこのカテゴリーに入るのか、考えながらではあったのですが、先ほどから議論があります若者の県外流出というところで、実は私も大学生の娘と今年受験生の高校生の娘と2人おりまして、2人とも県外大学を目指しております。その理由の1つが、どちらも非常に沖縄のことが大好きで就職はやはり沖縄でしたいと話すのですが、彼女達がやりたい専門分野が沖縄で学べないということも1つ大きな理由でした。前回、私の今の職場で、情報系であったり、AI、IoTの分野が、専門領域として非常に業務の置き換えがあるというお話をさせていただいたのですが、やはりデータ分析であったり、そういった専門的な分野の人材に限って本社の方から力を頂くケースが非常に多くあります。またオリックスグループは金融以外にも、再生エネルギー分野にも非常に力を入れておられて、そういう意味で申し上げますと、沖縄県でもバイオマスエネルギーというところで非常に注力している分野だと思っています。産業振興の人材育成という観点で切り口を変えて申し上げますと、やはり大学機関若しくは専門、高専の機関等、他の大学の部門でも、もう少し理工系の学部やこういった専門分野の新設に注力されてもいいのかなとちょっと考えました。琉球大学さんのほうで確かに理学部、工学部とあると思うのですが、県内でそういった理工系を学ぶ学生さんの数といえば、多分100名に満たないか、そこら辺りではないかと考えています。やはり、これから沖縄県の新しい産業振興を担う人材を育成するという観点で言うと、そういった専門分野が学校教育の中に新設されていってもいいのではないかなと考えています。インバウンドの観光需要の受入れは、どうしても平和というところを前提とした産業になっているかと思っています。今のようにウイルスの感染だとか、そういった影響を受けやすい業種でもあるかと思うので、是非別の産業の振興、開拓に当たっては、その辺りの専門分野の設置というものも検討してみてはどうかと考えました。なので、ここは修正できないかなというところで検討した項目になっております。以上です。

宮平委員長：はい、ありがとうございます。修正なのか。あるいは、拡大なのかもしれないですね。

平良副委員長：そうですね。

宮平委員長：それですね、ここの、高学歴県外就職・進学のほうをコピーしてもらって、後ろに括弧付けでやるといいのかな。括弧付けしていただけますか。この文をコピーしてもらって、Modifyのところ、Magnifyのところ、そこに。後ろに括弧付けしていただければいいかなと思います。「応用できないか」の高学歴者の県外就職ですね。

(※会議資料 p.6 項目 Modify「修正できないか」、Magnify「拡大できないか」へ加筆)
はい、これでいいと思います。あともう1つは、理工系に限らず、これから必要な知識

のほうがもう少し幅広くて応用が利くという可能性も、まあ、ここで仮置きしておきましょう。こういう形で進めていきたいと思います。他に、どうでしょうか。平良さん、こんな感じで付け加えると据わりがいいかなと思いますが、いかがですか。

平良副委員長：はい、ありがとうございます。もう1つあるのですけれど、実は弊社のほうでは3年前ぐらいから、産学共同研究というものを進めておりまして、先ほど、鯨本さんのお話にもございましたけれど、どうしても沖縄県の皆さんで、非常にポテンシャルが高いのですけれどシャイな方も多くて、やはり県内に留まりがちなところを、何とか県外の方との異文化の交流というところでコネクションを持ちたいとずっと考えておりました。すごく御縁がありまして、神戸大学と立命館大学の准教授の先生方と弊社の悩みどころである課題を研究しようということで、ある意味、地方の創生プログラムのようなものなのですけれど、学生さんと企業、私達の職員と合わせあって、アイデアソンだとか、そういったアイデアを出しながら自分達のビジネスがどのように変化していくのか、どういうふうな新しい未来を築けるのかというプログラムを一緒に進めていくことになりました。こういったプログラムを、本来であれば沖縄県の学校の皆様と我々企業の職員と一緒に進めていくというのが、良いのかも知れませんが、また県内に留まらず、もしかすると県外の学生さん達ともこういったネットワークが築けていければ良いかなと思いますので、この拡大していくという考え方の1つに学校と企業との共同プログラムみたいなものを、是非学校のプログラムの1つとして組み入れていくという事は行っていただきたいなと思いました。私のほうからは、このページからは2つになります。

宮平委員長：ありがとうございます。こういうふうにもいろいろと付け加えていくと、また厚みが増して面白い化学反応が起きますので、どんどん仰っていただきたいと思いません。ではまず、ここの「拡大できないか」ということで、産学連携プログラムですね。平良さんには後でまた、それによってどういう効果があるのか、具体的にこんなアウトカムがあるというのがあれば御提示いただければと思っています。

喜屋武委員：今のお話を聞いていて、産学連携プログラムの部分ですけど、今回、福祉や介護、あと芸術の先生方がいらっしゃるんで、ちょっと見た感じのところ、どうしても福祉や介護、伝統のところだけが課題があるように書かれているのですが、今、観光業も建設業も全ての産業で人材不足になっているので、様々な人材が不足しているということをテーマに入れてほしいなと思うことが1つあります。私のほうで産業人材をどう育成するかというプログラムを7年ほどやっているんで、建設業界さんのお話をさせていただきたいと思います。建設業界さんは工業高校の支援をよくされていました。商業高校で工業簿記の受験のお金を払うというようなこともされていたのですが、そも

そも高校に入る段階で工業高校を主体的に目指すという子が少ないということで。小学校や中学校から、建設業や土木建築というのは全ての私達の暮らしに関わっているのだということをお話ししていきませんかということをお話しさせていただいて、少しずつ進めていきましたら、高校の学科が1つ増えたのですね。今まで土木系とか建設系というのは1つしかない学部が多かったんですけど、応募する中学生が増えた、高校進学が増えたので、学部が1個増えたということで、建設業界さんから、早いうちからの産業理解に業界団体が力を入れること、産学連携することによって自分達の産業を将来的に好きになる、主体的、積極的に入ってくるという手応えがすごくあったというお声がありました。もしかして次の会議にも関わってくるのかも知れませんが、産業全体で早いうちから子供達、学校、公教育のほうにも入っていく、若しくは放課後教室みたいなものでも結構なので、大人のほうが入っていくということをやれば、今の沖縄が抱えている様々な業界での人材不足とか、高学歴の方が県外に行くこともオツケーなのですけれど、先ほど、山崎委員が仰ったように、いつか自分達が力を付けて、我が島、我が地域に戻って来るのだというところの形が1つできるんじゃないかなと、高校の学科が1個増えたというところで感じています。

宮平委員長：今の話、これは「修正できないか」の部分に入るかな。

喜屋武委員：福祉の先生がいらっしゃるので福祉だと思うのですが、いろいろな業界が人材不足ということがあるので、もう少し広げていくのもいいかなと感じています。

宮平委員長：人材不足でそれを解消するために、早い段階から。

喜屋武委員：魅力を伝えるというようなプログラムを積極的にやっていく必要性があります。更にこの取組は実は韓国のほうがとても興味を持って、視察が来て私も一緒に回ったのですね。沖縄県という小さなエリアでこういう産業教育を積極的にやっているというのが、アジア圏でもないということで見に来てくださっていたので、この取組は面白いのではないかなと思います。

宮平委員長：例えば、介護・福祉のコロナによるマイナスイメージとか、その辺とか修正できないのか。要するに、カッコいい仕事、あるいは人の役に立つ仕事だということ意識してもらおうということですよね。

喜屋武委員：そうです。

宮平委員長：それをどういうふうにするのかということで、「修正できないか」のほうに移ってもらえますか。そのほう、矢印を置いていただいて。

（※会議資料 p.6 項目 Modify「修正できないか」へ加筆）

この中で、ある意味、社会貢献性を伝えるとか、そういうことをちょっと書いておきましょうかね。で、韓国の、何ですか。

喜屋武委員：韓国の、日本で言う、国立教育政策所みたいなところがあるのですよ。文科省の諮問機関でいろいろなキャリア教育とかいろいろな教育を提案して政策にもっていくところが視察に来ました。

宮平委員長：来たということですね。沖縄の事例を。

喜屋武委員：はい、沖縄の事例を。建設とか観光とか、いろいろな産業のものを見て、報告書をいっぱい持って帰ったので。

宮平委員長：そうすると、これは沖縄が誇れるものの1つになるということになりますね。では、他に。今までの発言は、山崎さん、小島さん以外は全て女性が発言なさっているの、男性の方々も、是非積極的にお話しいただければと思います。

伊良皆委員：「結合できないか」のところは私の前回の発言を要約した文言が書かれているのですが、若干、余り自分の中でまだじっくりきていなくてですね。例えば、置き換えるのであれば、福祉・介護人材の確保による働き続けられる社会づくり、というような方向性で提起したつもりだったんですけど、ちょっとうまく伝えきれなかったかなと思っています。当事者の皆さんの社会参加というのは大切な課題なのですが、どうしても保育が受けられないからお家にいないといけないとか、親が介護が必要になったから離職せざるを得ないとか。親の介護の問題で離職することを介護離職といいますけれど、主に50代以降、まだ働き盛りでせっかく培ったノウハウを社会に還元していく段階で、こういった介護の問題で仕事を辞めざるを得ない場合とかですね。また、今回のテーマからは少し脱線するかも知れませんが、家庭内暴力とか育児放棄とか虐待とか、福祉問題にも今後つながってくるので、福祉・介護の人材を確保することで、1つのインフラだと思うのですが、働き続けられる社会をつくっていくということが、今後重要ではないかなと思っています。離島県ということで、離島のほうも福祉・介護人材がなかなかいらっしやらないという現状もお聞きしていますけれど。ただ、在宅福祉サービス、ホームヘルパーさんとかを育成して、島で長く住み続けられるように取り組んでいるところもありますし。また、外部、島外から介護人材を確保したいと考えているけれど、その島に外部から移住してきた方が、住む場所が確保できないなどの

理由で、なかなか人材の確保が難しいというような課題もあるようです。ちょっと私がこのフレームワークに慣れていないので、どこにどういうふうに直したらいいかというのは、ちょっと、すぐには申し上げられないのですが、そういった方向性で少し、皆さんからも意見を頂きたいと思います。以上です。

宮平委員長：ありがとうございます。今の「結合できないか」のほう、矢印を入れていただいて。

（※会議資料 p.6 項目 Combine 「結合できないか」へ加筆）

今、せっかく、伊良皆さん、社会インフラということを仰っていましたので、社会インフラとして位置づけるということにしましょうか。そして、「代用できないか」で県外移住者の方の働き場として提供できないかということですよ。

（※会議資料 p.5 項目 Substitute 「代用できないか」へ加筆）

そのときに、課題となるところが多分出てくると思いますので、またその課題は後で見たいと思います。こちらにちょっと入れておきましょうか。あとは、他にどうでしょうか。

嘉数委員：先ほど、ちょっとお話が出ましたが、伝統文化・芸能というものが産業として捉えられていいものかどうかという課題がいろいろあるかと思います。私の中で一個人の意見として、こちらに書いております産業振興というのは沖縄県全体で持っている伝統文化・芸能面のことかなと捉えておりました。この後に出てくる地域の問題、地域独自の文化・芸能というのも多様にある地域、島ですので、沖縄県民全体が沖縄の文化という形で、どうやってそれを担う人材が出てくるか、そしてまたそれを鑑賞する観客層、使用する、必要となってくる層を高めていくというのが、今、伝統文化・芸能の課題、芸術の課題かなと感じております。そもそも沖縄県にある伝統文化、芸術をもっと沖縄県民自体が知る環境づくりを整えていくというのは非常に大きな課題かなと思います。これは文化・芸術面に限らず、いろいろな面であるかと思います。例えば、演じ手、観客層を育てるといっても、それに親しめる環境、触れ合う環境というのがまだまだ整っていないのではないかなと感じています。よって、次の点に係るかも知れませんが、学校、教育の現場でもそういった沖縄ならではの、沖縄のアイデンティティというものの、魅力をもっと伝えていけるような環境づくりをすることで、その演じ手になりたいと思う子も出てくるでしょうし、またそれを鑑賞する楽しさ、魅力というのを知るといっても沖縄ならではのものではないかなと思います。そういった自身のアイデンティティや独自性を知った上で県外に出て行って大きな活躍をして、また様々なものを得て帰ってくるというのも、とても素晴らしいことだと思います。逆に言えば、今県外から沖縄の文化・芸能を学びに来るといの方々も実際にいるわけですから、そこはまた沖縄でしか学べないもの、受け取れない環境というものを、地元としてはし

っかり整えておく必要があるのではないかなと感じております。

宮平委員長：ありがとうございます。そうすると、こちらの伝統文化、人材育成を、という問題はこの転用もできるわけですね。要するに誇りとか。

嘉数委員：そうですね。

宮平委員長：では、転用の部分にもちょっと盛り込みましょうか。この「伝統文化・芸能を担う人材の育成と観客層の育成」、これをコピーしていただいて。これはアイデンティティーの確立ですね。嘉数さんが仰っているのは、これで。

(※会議資料 p.5 項目 Put to other uses 「転用できないか」へ加筆)

そしてもう1つ。次、隣ですが、冒頭、有木さんが仰っていた変化に対する不寛容性、これを何とか削減できないかということですね。変化に対する不寛容性あるいは保守性とか。不寛容性の削除とか削減とか。

(※会議資料 p.6 項目 Eliminate / minify 「削除／削減できないか」へ加筆)

はい、こういった形で。

有木委員：喜屋武さんが仰っていたことに追記するような形になるかも知れないのですが、福祉・介護人材の不足ですとか、福祉・介護のコロナによるマイナスイメージは、沖縄の基幹産業である観光でも、やはり同様の課題があります。我々、宿泊施設さんですとか、観光施設さん、飲食店さん、多くの事業主さんと取引をさせていただいている中で、実はコロナ前から人材不足というのは言われていたんですが、観光が基幹産業でありながらも観光事業に携わりたくないという人材が非常に多いというのが沖縄の地域課題でもあり、そこがコロナにより一段と加速しているというのは、今やはり言われていることです。これ、いろいろな産業をここに入れてしまえばきりが無いと思っているのですが、もっと産業ごとの人材課題の掌握と解決ということが非常に重要なかなと思っています。福祉・介護というところで人材がそもそも不足しているという観点があるでしょうし、観光でいうと、これからコロナが収束して、また成長していけば人材は当然必要になっていくのですが、人材を、数を増やしていくというのが非常に難易度が高い中で、何をテクノロジーに任せ、何を人材がやるべきかというところをきちんと整理してマネジメントしていく人材が必要であるというのが、今後の観光業界の人材の方向性だと思っています。そういう産業ごとの人材課題を明確にして解決していくことをどこかに付け加えてみてはいかがかと思っています、それが、ちょっとどこかなと思いつながら。

宮平委員長：では、ここの逆転、再編集のところに入れましょうか。

有木委員：はい。産業ごとの人材課題の明確化と解決という感じですかね。

宮平委員長：そうすると、これで再編集できないかということで。括弧付で再編集と入れておきましょうか。

(※会議資料 p.6 項目 Reverse / Rearrange 「逆転／再編集できないか」へ加筆)

はい。こういう形でやると、今仰ったことがここで明確になってきますかね。どうですか、有木さん。

有木委員：はい、よろしいかと思えます。

小島委員：大学で人材育成をちょっとやっていますので、すごく耳の痛い話とか、そうだなと納得するところとかたくさんあったのですけれど。今あったように、いろいろな産業ごとに求められる人材は変わってきますし、それらは既に、コロナの前でしたけれど振興計画の評価の際にいろいろなものが挙がっていますというのが、第1回の会議でも紹介があったと思いますので、それぞれ分けて整理する必要があるのかなと思っておりました。あと、高学歴者の県外就職ですとか、理工系大学学部の話ですとか、非常にそうだなと思っております。なかなか変化に対応できていないというのは、教育機関も正にそうだなと思っていて、これは琉球大学が悪いというわけではなくて、全体的な一般論としてなのですから、すぐに組織を変えるというのは、宮平先生もよく御存じだと思うのですけれど、大学としても今できる状況にないのかなと思っています。その辺りは、文科省も内閣府の地方創生を担当しているところも課題意識として持っていて、既に地方創生に資する魅力ある地方大学の実現に向けた検討会というのも9月に開催されているんですが、その中でも地域でどういった人材を、これは産業もそうですし、この次の地域人材もそうですけれど、そういったものを地域で共有しましょうと。これは、前回私も発言した、正にその通りなのですから、そういう共有するプラットフォームをつくって、そこからバックキャストで目指すべき人材を大学でやったり。あと、大学だけではなくて、先ほど、小中とかの話もありましたけれど、連携していく必要があるのかなと思っています。正にそれを全国的に求められているタイミングなので、沖縄が特に必要とするところをうまく整理した上で、沖縄でどういう部分を担うのか、又はそれについては県外若しくは海外で学んで、ということでもいいのではというのが整理できればというのが、前回の発言と流れになるのですが、今回、このフレームワークの中で、それをどこに、というのがなかなか厳しいのですけれど。大学としては、そういう共有のところから始めると、うまく組織とかに落とし込めて取り組みやすいのかなと思っているところを発言させていただきました。

宮平委員長：ありがとうございます。小島先生、この「拡大できないか」に入れますか。応用、拡大。

小島委員：そうですね。正に、そういう取組のところからでよろしいかと思います。

宮平委員長：ではこちらのほうに文科省と内閣府の地方創生人材。

小島委員：正に今動きがあるので、それにうまく合致するように広げていければと思います。

宮平委員長：創生人材を沖縄へと拡大・応用できないかというところで。

(※会議資料 p.6 項目 Magnify「拡大できないか」へ加筆)

これでやると、今先生が仰ったようなことが、我々のほうでも認識できて、県のほうでも認識できるのかなと思います。いかがでしょうか。では、こういったところで。また他のところをやりながら、行きつ戻りつで進めたいと思います。では、その次7ページ目いきましょうか。

(※会議資料 p.7 表示)

③SCAMPER によるアイデア出しー学校教育と社会教育の総合的・横断的な取組等の推進

宮平委員長：学校教育と社会教育の総合的・横断的な取組等の推進に関する意見について、学習指導要領の改訂と GIGA スクールであるとか、この辺を私のほうで少し落とし込んでみましたけれど、ちょっとこれでは違うのじゃないかというのが多分出てくると思います。その辺、御発言なさった先生で、これはここではなくてこちらのほうが良いということがありましたら、そこから修正して、先ほどのような議論をしたいと思いません。では、どうぞよろしくをお願いします。

山崎委員：ここに書いてあることの議論というよりも、先ほどの話を受けての学校教育とかの位置づけというところで考えたときに、すごく基本的な話になってしまうのですが、もっと人間の好きの力とか、世の中に役立ちたいとか、人に認められたいという基本的欲求があると思うのですけれど、そこをもうちょっと育める仕掛けが小中ぐらいでできないかなと単純に思っています。算数とか国語とかの点数を上げるだけではなくて、それを活かすところが社会にこんなにあるのだよというのをうまくいろいろな形で見せたいと思うのですけれど。もうちょっと踏み込んでみると、例えばインターンとかジョブシャドウとか、大人都合ではめ込んでいくのではなく、本人が主体的に。それに

行かなくてもいいのですよ。行かないという選択肢もありだと思っておりますけれど、行きたい子が興味を持ったところに。例えば、今、若い子といろいろ会うことがあるのですが、先ほど有木先生が言っていたみたいに、皆、グループワークをやると観光のこととか課題がめっちゃくちゃ出てくるのですよ。そんなに課題感を持っているのに、何で就職しないのというのもあるし。あとは、おじい、おばあとか、めっちゃ大好きなのに介護には人が不足しているわけですよ。子供達が持っている現状の課題、社会に対する認識と、それを実現する、課題解決する場が、多分余り当事者意識としていないのだらうなと思っています。だから、子供達を社会でお客さんのように扱うのではなく、中学生だとしても一当事者として考えて、それを自分はどう社会に役立てられるのかとか。大人として余り見せたくない部分もいっぱいあるかもしれないですけど、リアルな社会をちゃんと見せてあげて、大人扱いしてあげた上で好きを育てていくというか。そんな教育をすると、学校にいたときにもっとここを学ぼうとか。例えば、専門校、農業高校。私、農業の今、家族のこの課題にすごく興味があるから農業校に行くのだという子も増えるかもしれないし、介護学校に行くという人も増えるかもしれないし、建設に行くかもしれないとも思うのです。大学の役割は、そこを更にかなり上級のところに持ち上げていくような機関だと思うので、実社会に遥かに引っ張られるような勉強ができる機関になっていけばいいのかなと思っています。就職斡旋とか、いい大学に入るための勉強というところからなるべく少しでも解放する仕組みをこの世代のうちに早くつくってあげたい、それを一早く沖縄で小さい単位でできないかなと思っています。

宮平委員長：ありがとうございます。まず1つは、子供達の、何かと「結合できないか」ですよ。子供達の問題意識と何かを結合しましょうか。子供達の問題意識。観光は問題意識ですよ。

山崎委員：はい。持っていますので。

宮平委員長：おじい、おばあというのは問題意識ではないですよ。何だろうな。興味関心ですか。

山崎委員：そうですね。

宮平委員長：問題意識と興味関心ですね。これも、山崎さんが仰っているのは自発的なものですよ。

山崎委員：そうですね。その部分をどう伸ばすか。就職のときに、お金を稼ぐ為にこの業界を選んだとか、内定が出たから入ったとか、そういう行き方ではなくて。それもい

いのですよ。否定するわけではないのだけれど、やはり人間の持っているモチベーションを若いうちに使っていいんだよ、表現していいんだよ、ということを社会が許容してあげないと。こう行けみたいなのはどうかなというのが常にありますね。

宮平委員長：これと何を結びつけるか、ですね。教育と結びつけるのか。まずは「教育と結びつける」にしておきましょうか。あともう1つは、子供たちの自発的な問題意識・興味関心は更にいろいろと拡大もできるわけですよ。

(※会議資料 p.7 項目 Combine「結合できないか」へ加筆)

山崎委員：すみません、フレームワークに当てはまらないかもしれないですけど。

宮平委員長：どういった方向で拡大できますかね。

山崎委員：例えば、世の中に100、200、1,000 ぐらいの課題があるかも知れないのですけれど、そこでトップバッターで働いているような方々とか、動いている方、行政マンでもいいと思うのですけれど、そういう方々が小中とかで実際に子供達の前でいろいろな課題を披露してあげて、例えば民泊でも何でもいいのですけれど、表面的に何とかお客さんで入るのではなく、自分の選択で本当にずっぱり入ってみるというか。それを小中ぐらいでできると、結構学び方が変わるのじゃないかなと。

宮平委員長：そうすると、実際に当事者になってみるということですよ。

山崎委員：そうですね。

宮平委員長：問題意識・興味関心を当事者となって解決してみるということですかね。

(※会議資料 p.7 項目 Magnify「拡大できないか」へ加筆)

山崎委員：はい。その代わりに、社会の問題があぶり出されてしまうので、例えば介護業界が抱えている問題とか観光業界が抱えている問題が、子供視点でがーっと出てきてしまうと思うのですけれど、そこと社会が向き合って変わるということに対して、有木さんが仰ったみたいに寛容な社会に変わっていかないと、今度は、ミスマッチでどんどん離れていってしまうというまずいギャップが起きるわけですからね。

宮平委員長：そうすると、この体験するということは「転用できないか」というところにもできますね。ミスマッチを発見する、とかそういったところにも出てきますか。

山崎委員：そうですね。

宮平委員長：ミスマッチの発見にしましょうか。取りあえず、そういうふうに入れておきましょう。

（※会議資料 p.7 項目 Put to other uses 「転用できないか」へ加筆）

はい。こういった形で仮置きしてみて。有木さん、こういう形で取りあえず置いてみたのですけれど、どうですか。

有木委員：はい。非常に良いかと思えます。

宮平委員長：平良さん、いかがですか。

平良副委員長：はい、ありがとうございます。私も小中学校の頃から、こういった社会との接点を持つという場はあってもいいかなと、これまで結構何度か思考したことがあります。学校の先生達も、そういう意味でプログラムを作ってみたり、重労働で問題になっていることもよく認識しております。なので、例えば我々のような企業人が学校のほうに出向いて、こういうお仕事があるのだよとか、こういうことで悩んでいるのだよ、みたいなお話ができるような場だとか、そういった機会が持てないだろうかということも考えたこともございました。ただ、教壇に立てる、立てないというのが、何か資格がないと教壇に立てないだとか、いろいろ、ルールだとか規制があることは承知しているのですけれど、そういった少し違うプログラムがあってもいいのではないかなと感じております。また、視点は違うのかも知れませんが、やはりオンラインがここまで非常に浸透してきておりますので、海外で取り組まれている良い事例を参考にするという視点も良いのかなと思っておりまして、中にはキャンパスを持たない大学であったり、先生を自由に選択できたり、生徒が自ら社会課題を解決できるようなカリキュラムが徹底されていたり、先生が教えるというよりも生徒同士で解決をするというようなプログラムを推進している大学も、最近では非常によく耳にするようになっていきます。やはり沖縄のすごくいいところで、異文化交流、チャンプルー文化というものは、とても大事な文化だと思っています。なので、例えば大分にある APU のような、半分以上外国人というような環境もあっていいのかなと考えたら、もう少し人材の交流であったり、企業と子供達との接点であったり、県を跨ぐ接点を持つだとか、何か結ぶ活動というものを縦、横に広げるとするのは非常に良いかなと感じました。

宮平委員長：ありがとうございます。今、2つぐらい出たかなと思います。まずは、チャンプルーで結びつけるということですね。結合できないか。チャンプルー文化で結びつけるということですね。

(※会議資料 p.7 項目 Combine 「結合できないか」へ加筆)

あとは、次の再編集のところもそうですね。チャンプルー文化でいろいろなものを見方を、外国の人達と見ていくとか、いろいろなところが出てきましたね。再編集のところに行きましようか。

(※会議資料 p.7 項目 Reverse / Rearrange 「逆転／再編集できないか」へ加筆)

あとは海外事例がありましたね。Put to other uses ですね。海外事例を参考に、転用できないか。大学の事例とか、その辺ですね。転用できないか。

(※会議資料 p.7 項目 Put to other uses 「転用できないか」へ加筆)

では、次、行きましようか。伊良皆さん。今こういった形で、子供たちの自発的な問題意識・興味関心を教育とか様々な問題解決に結びつけるという話がありましたけれど、伊良皆さん、いかがですか。

伊良皆委員：前日も福祉教育の話をさせていただきました。「拡大できないか」のところにある「学校と地域が連携した福祉体験・ボランティア体験」ということで、一方的に車椅子体験、アイマスク体験のみを体験すると、子供達は障がいとか高齢・加齢が怖いものであるとマイナスなイメージを持ってしまいがちなのですけれど、例えば、そういった中でも、生活している方々を招いて実際のお話を聞いて、社会がこういうところに配慮すれば自分達は暮らしやすいんだよとか、例えば駐車スペースで車椅子専用のスペースに停めていると自分達が止められなくてとても困ったよとか、そういったことを生の声として聞いていただいたり、またその車椅子の方を支えている介護のヘルパーさんも同席して、ヘルパーさんになぜその介護の仕事を選んだのですかとか、仕事に対するやりがいを聞いたりとか、その御家族の方にも助けられていますよという話を聞いたり。学校の先生方が大変お忙しいというのは重々承知なのですけれど、何か連携してゲストスピーカーといいますか、外部講師というところちょっと大袈裟だと思うのですが、地域の方を学校に招いてお話しすることで、福祉的なマインドの醸成につながるのじゃないかなと思っています。また、小中学校の生徒さん達は、自分達の地元の先輩達の声はとても素直に聞き入れてくれるというイメージを持っていますけれど、これは本島に限らず離島の子供もそうだと思うのです。それぞれの分野で活躍している先輩、若しくはまだ学んでいる段階の学生さんでもいいのですけれど、なぜ自分はこの道に進んだのかとか、仕事をしていてのやりがいとか、仕事の魅力を子供達に学んでいただく機会というのを、ITも活用しながら、例えば動画を撮って子供達に見てもらおうとか、離島に行かなくても子供達に自分の現状を伝えるというような仕掛けとか。誰がやるかとか、予算はどうするのだとかいうのを抜きにして、アイディアとしてこういう形で沖縄の様々な課題について考える機会を子供達に、生徒の段階から持っていただくというのも今後の未来につながるのじゃないかなと思っています。以上です。

宮平委員長：ありがとうございます。そうすると、今の話、この「代用できないか」のところに入れましょうか。一線で活躍している人達を講師として招く、そういった形で代用できないかということですね。それで興味関心を深めていったりとか。

(※会議資料 p.7 項目 Substitute「代用できないか」へ加筆)

喜屋武さん、こういうものは今やっていますよね。

喜屋武委員：はい、やっています。

宮平委員長：これをもう少し高めるためには、どうしなきゃいけないかというふうなことについては。

喜屋武委員：そうですね。先ほど何人かお話が出たのですけれど、一線で活躍している人が学校に行って話をするというのは、学校でも今、普通になってきていて、もうやり始めているので、そこはある程度、沖縄は逆に進んでいるほうだと思うのです。問題は、これからは逆にスキームとか、学んだことがどう社会に役立つのかということが子供達は分からないから、多分どの仕事に行きたいか理解ができないと思っているのですね。国語、算数、理科、社会、音楽、体育、全部含めて、例えば介護職だったら歌って踊れる介護とか、歌が好きだから文化・芸能に行くことも可能だけれど介護職というのも実は選択肢に中に入るのだとか、この様々な学びが全ての職業につながっていくとか。又は、日本の子供達は理数系が少し弱いのですね。成績はいいのですけれど、世の中の役に立つということを感じる力が弱いと言われているので、こういうことをやったらこの会社に入れるよとか、この職業に就けるよというふうに、もう少し大人が、自分が小中高大で習ってきたこと、学んできたこと、経験したことが今の仕事とどう結びつくのかというところを話してあげるほうが、これからのキャリア教育につながっているし。学習指導要領の中に今回、どう子供達が社会や世界と関わり自分らしい生き方を考えていくかということがど真ん中に入ったのですよ。学びに向かう力ということが中心に組み立てられた学習指導要領なので、そこら辺ができる仕組みになっていけたらいいなと感じます。

宮平委員長：ありがとうございます。では、ここの部分はそのまま残しておいて、一線で活躍している人達を講師として学校に招く、関心を深める、の部分をちょっとコピペしていただけますか。これを再編集のところを持っていきましょうか。再編集のところを持ってきて、今、喜屋武さんが仰っていたのは、学校の学びと職業とのつながりですね。関心を深める、はそのままで矢印を入れていただいて、学校の学びと職場との関連性を教えるというようなことですかね。こういうふうにすると、今の発言がつながってきますかね。

(※会議資料 p.7 項目 Reverse / Rearrange 「逆転／再編集できないか」へ加筆)

伊良皆さん、どうですか。

伊良皆委員：ちょっと私が言い足りなかったところを補足してくれて、ありがとうございます。実際、ケイオーパートナーズさんとか、福祉の仕事の部分とかを学校に行ってお話しする機会もありまして、そういうところから福祉業界に関心を持っていただきたいなというふうに取り組んでいましたので、そこをまた実際の職業として捉えるというところが1つ、ハードルというか課題なのかなというのを、話を聞いていて理解することができました。ありがとうございます。

宮平委員長：大学人としては、学生に常々、捨てる学問なんてないよと言っていて。学生なんて今、単位を取るだけで、私、ダンプカーと言っているのですけれどね。ダンプカーって荷物を下ろしたら空っぽになりますよね。学生なんていうのは、まあ、ここで愚痴っても仕方がないのですけれどね。そういうふうにするので、ちょっと困ったものですが。嘉数さん、この辺、今議論が大分深まってきましたけれど、芸能と関連付けていろいろなことができると思うのですが。嘉数さん、お願いします。

嘉数委員：今皆さんが仰ったことと重なるかも知れませんが、確かに、学校現場でも大いに沖縄独自の文化・芸能というものに触れる環境づくりをしていってもらえたらなと常々思っています。その中でどうしても学校の先生達の口から語られるものと、実際に携わっている人達、先ほども一線で活躍している方々という声がありましたところに、大変同感しておりますけれど。実際に、幼いときから本物の力を知ってもらう、見ていただくということがとても重要ではないかなと思います。そして私達もそうなのですが、これは良し悪しは別として、なぜ今その世界に携わっているのかというと、やはり好きだからという情熱1つしかない人達が多く存在するのですね。ですから、「仕事は舞台です」と言いますが、仕事として舞台でお金にはならないというのが現状ではありますが、その為に他の仕事をしながら、自分の「仕事は舞台です」と胸を張って言える世界の人達がいるという環境も大いに知っていただきたいと思います。また、そういった方々が実際に学校現場を訪れて、自分の実演を見ていただく、またお話を聞いていただくということは、皆さんの活動の場にもつながるわけですから、ある意味、それが産業として仕事として職種として、今後大いに成り立っていくことにもつながるのではないかなと思います。できる限り、教科書の上だけ、映像だけではなく、実際に生で触れる、感じる何かというのが、文化・芸能には多く詰まっていると思いますので、早いうちにそれを知っていただくような学校教育につながっていくことができればなと感じています。

宮平委員長：嘉数さんが今仰っているのは、実は、人生 100 年時代においては、1つの単一的な仕事では無理なのですよね。あと、有木さんのほうからまた、ちょっと付け加えていただきたいのですが、あるいは小島先生、金城先生のほうからでもいいのですけれど。産業の寿命が大体 30 年と言われているのですけれど、そういった意味では副業を持つような形で、どんどん世の中が変わっていったところもありますので。どうしようかな。では、小島先生。今の、人生 100 年時代で副業というのはどの辺りに付け加えたほうがよろしいでしょうかね。

小島先生：私も、今、宮平先生が仰ったように、学生には、「1つの能力で食っていけるとするな」という話はよくしてきて、学び方をしっかり学ぶということは言っているのですけれど。そうですね、それをここにというのは。ちょっとすみません、私が理解不足で。どうですかね。学び方を学ぶ、みたいなところの重要性をどこかに入れておきたいというのは、先ほどの話を聞いていて思ったのですけれども。

宮平委員長：応用できないか、ですかね、学び方を学ぶというのは。取りあえず、こちらに仮置きにしておきましょう。

(※会議資料 p.7 項目 Adapt「応用できないか」へ加筆)

宮平委員長：有木さん、いかがですか。

有木委員：産業構造という観点でお話できないかも知れないのですけれど。私が今対峙している業界も含めてのお話をさせていただくと、リクルートという会社が今年で 62 期になるのですが、62 年で 2 人しか定年退職が出ていない会社になります。基本的には、割と、リクルートをステップに社会に出ていくという考え方がある企業ではあるんですけど、弊社がそうだからという話ではなく。ちなみに今リクルートは、兼業が可能になっています。自分が対峙している事業と競合にならない限りは可能という制度になっているのです。何か、過去の産業構造だけではなく、特にこういうコロナ禍になりインターネットがどんどん普及していく中で、いわゆる個人としても企業としても地域としてもそうだと思うのですけれど、競合となるものとか、自分達が勝ち残っていくためのプレイヤーというのがすごく幅広くなっている中で、1つのスキルとか、持っている資源だけでは勝てない世の中になって来ているのだろうなと思ったときに、よく我々も、若手のメンバーにも言いますし、私もずっと先輩達に言われてきたことですが、ラベルを増やしていきなさいと。人は掛け算でキャリアを積んでいくということを、すごく言われていまして。というふうに思ったときに、山崎さんが仰っていた自発的とか主体的という、そこがすごく学校教育とかにも重要なのではないかなと思っていまして、与えられるだけではなくて、やはり自分で選択して自分のラベルを自分の意思で選んで

いくということが、これからは特に求められていくのじゃないかなと。変化に対応できるスキル、場面对応力というのですか、そういうものを育成していくということが、非常に重要なのではないかなということ、今皆さんの話を聞いていて思いました。

宮平委員長：ありがとうございました。そうすると、ここの「拡大できないか」のところに、今の文言を入れましょうか。ラベルを増やしていくとか、場面对応力を増やしていくとか、ですね。そういったところですね。

(※会議資料 p.7 項目 Magnify「拡大できないか」へ加筆)

あと、チャンプルー文化なんか、正に嘉数さんの、組踊なんかチャンプルー文化ですよ。ね。

嘉数委員：琉球の文学と歌舞、他国の芸能の要素も取り入れながら創られたという面からは、チャンプルー文化の概念と通じるものがあると思います。

宮平委員長：例えば、組踊なんかというのは、沖縄の伝統の三線と歌舞伎が融合して、どんどん発展させていったとか。

嘉数委員：組踊、琉球舞踊というのは沖縄の伝統芸能として築かれてきたものではあるんですけど、現在でもそれが新しい作品、次々と新しい発想や感覚を取り入れて、いろいろな創作作品、新作物を出していくという面では、沖縄芸能の強みとして、そのチャンプルー文化というのが根付いているかなとは感じます。

宮平委員長：先ほど、冒頭、有木さんが言っていた変化への対応の仕方というのは、もしかしてこのチャンプルー文化のほうで応用、代用できるかもしれないですね。その辺もちょっと面白いかなと思ったりします。

平良副委員長：今の伝統、伝統芸能のお話から、誤解がないようにお伝えしたいのですが、もしかしたらこれが新しい産業振興のビジネスになるのじゃないかなと思いつながら、お伺いしておりました。空手も伝統舞踊も琉球舞踊も、もしかすると、なまものを見てその場のリアルな状態、リアルな皆さんの様子を、例えば映像を通して、ショービジネス、エンターテインメントのようなビジネスにつながる可能性もありますし。また、21世紀ビジョンの中で、心豊かで安全・安心に暮らせる島というような項目の中で、我々の住んでいる癒やしの風土、それから健康長寿を支える食文化みたいところが世界中から注目されるような沖縄というお話から、ショービジネスではない、例えば癒やしというところでビジネスに発展できるのではないかという可能性を感じながら、お伺いしておりました。伝統を継承するというに加えて、こういう癒やしの文化や娯楽

の文化をオンラインと重ね合わせてビジネスにつなぎ合わせることができないかなというふう感じたところと、コロナの影響で地方分散というものが非常に進んでくるかと思いますが、企業の本社機能を東京から地方に移すという動きも加速されておりますので、そういった県外からの流入者の方に対して沖縄の文化をお見せすることができる、これを上手にITと活用することによって新しい産業振興の1つにもなり得るのじゃないかなと思ひまして、お伺いしておりました。決して、伝統芸能、リアルなものを閉じていくということではなくて、それを通して更に多くの方々に沖縄の良さをお伝えできるということがITを活用してできるのじゃないかなということも可能性として感じました。発言だけさせていただきます。

宮平委員長：ありがとうございます。これは、Magnifyのところ、拡大にしましょうか。伝統文化・癒やしを、IT活用によって県外発信、産業化の可能性、ですかね。取りあえず仮置きしておいて、後で修正するものは修正したいというところです。こういう形でちょっと置いておきたいと思ひます。

(※会議資料 p.7 項目 Magnify「拡大できないか」へ加筆)

喜屋武委員：今の平良さんのお話、私もとても共感しています。沖縄だからこそ文化は産業であってほしいという思いで、私も8年前に国立おきなわさんに行って熱い思いを語ったことがありますので、そこはオツケーなのですけれど、この課題って、前のページに入ってくるものなのかなと思ひているのですね。今書かれた「伝統文化・癒やしをIT活用によって県外発信し、産業化の可能性」というのは、前のページの産業振興を担う人材の部分のほうに強く関連するのかなと感じているのですけれど、いかがですか。

(※会議資料 p.6 表示)

宮平委員長：両方に置いておきましょう。どちらのほうの方がよりいいのかと、後で整理します。今日は、こういう形でディスカッションしながら、アイデアを共有しながらやっていきたいと思ひます。まだ議論を深めていきますので、仮置きしておきましょう。

(※会議資料 p.6 項目 Magnify「拡大できないか」へ加筆)

もう、後と20分しかないので、次に移りましょうね。どうもすみません。はい、次ですね。また後でやっていきます。テーマ3をお願いします。

④SCAMPERによるアイデア出しー地域社会を支える人材の育成

(※会議資料 p.8 表示)

地域社会を支える人材の育成ということで、取りあえず私のほうでこういうふうに仮置きをしておきました。各委員の先生方で御覧になっていただいて、ちょっとこちらは違うのじゃないかとか、あるいは今までの議論の中から、こちらとこちらは結びつけてこちらに置いたほうがいいのではないかと、というのがありましたら、どうぞ御自由に御発言ください。

鯨本委員：右下のほうに、離島地域の人材やスキル、ノウハウの不足、育ったことの肯定感、ということが書かれていて、先ほどの学校教育と社会教育のシートにも自己肯定感などについて書かれていたかと思いますが、この辺りの要素はくつつくかもしれないので、ざっくりお話をします。これまでの議論にもありましたが、先ほどいろいろな産業の第一線の方が講師になられているという話では、例えば地域では、地域を学習するプログラムがよくあって、私達の会社でもいろいろな離島地域で、小学校5、6年生を対象に新聞づくりを通じて地域を学んで、更に他地域の子供達と交流する、というプログラムを総合学習の中で実施しています。こうしたプログラムはいろいろな地域に似たようなものがあり、最近だと、広島県の大崎上島で学校と商工会とが連携した教育プログラムも注目されています。幼少期から、小中学校、高校ぐらいの頃から郷土を知り、地域の中で活躍している大人達の背中を見て、実際に自分と地域との関わりしるを発見していく。そういう取組がありますので、いろいろなところにくつつけられるのかなと思っております。1つ前のシートに書いていましたかね。(※会議資料 p.7 表示) 子供たちの自発的な問題意識・興味関心と教育ということを書かれている点、興味関心という言葉でもいいのですが、地域づくりの文脈の中だとよくシビックプライドという言葉でも言い表されますが、地域に対する愛着と誇りを醸成することによって、将来的に地元に戻ってきたりだとか、自分達が地域で活躍するイメージを早くから考えられるのではと思うので、そのような観点も入れていただければなと思います。

(※会議資料 p.8 表示)

宮平委員長：はい、分かりました。それでは、ここの、離島地域の人材やスキル、ノウハウ不足として、矢印を入れていただいて、例えば、子供達にまず、地元の魅力発見、ですよね。魅力発見とシビックプライドの醸成ですか。地元の魅力発見、他地域との交流。他地域との交流でシビックプライドという流れになっていきますかね。

(※会議資料 p.8 項目 Reverse / Rearrange「逆転／再編集できないか」へ加筆)

まずは自分の地域の魅力を発見していただかないと他地域と交流しても何が何やら分からないということになって。比較で自分達の地域ってこんないいところがあるのだと分かって、シビックプライドになっていくのかなと。文脈上はそうなりますけれど、

どうでしょうか、鯨本さん。

鯨本委員：文脈はそうですね。実際は離島地域に限ったことではなく、都市も含めて大体どこの土地にも当てはまることだとは思いますが。

宮平委員長：取りあえず、こちら離島地域ということに限定させていただきたいと思えます。これは、どこの地域でも一緒だということ。では、他に。

金城委員：今のお話を聞いていて、ちょっと思い出したことがあって。もちろん、自分達の地域の魅力を、まず地域の人から学ぶということも気づきのきっかけになるとは思いますが、数年前まで国際交流関係の委員を学区内でやっていて、いろいろと学生達と交流させていたというのと、私自身が、大学院は県外、北海道へ行ったということもあって、やはり県外へ行ったりすると、沖縄の魅力って何とか、沖縄の人なのだからこういうことができるとか、方言しゃべれるとか、よく質問されるのですが、やはりそういう機会って重要だな、学生自身が気づくきっかけになるなというのは感じました。海外から受け入れるときもそうなんですけれど、今いる留学生だけではなく短期で何人か受け入れたりした中でも、やはりお互いの交流、文化の話をするというきっかけも、自分の地元のことを意外と知らないということにまず気づくというところから始まって、それで学んでみようとか、こういうもの行ってみようとか、一緒に体験したりも含めて、そういう機会が重要だなと感じていました。やはり小中学校からそういうのがあるといいのではないかなとずっと感じていたので、仕組みとして生かしていけたらいいのではないかなと思っています。ありがとうございます。

宮平委員長：分かりました。ありがとうございます。そうすると、これは、地域会の人達との交流を通じて地元の魅力を知るということですね。こちらの代用の部分が寂しいので、代用にまず入れておきましょうか。地域外の人達との交流によって地元の魅力を知る、それを早期、早い段階から行う、ということですね。

(※会議資料 p.8 項目 Substitute「代用できないか」へ加筆)

取りあえず、こういった風に置いておきましょう。他に、どうぞ。いろいろな問題点、今のような発言、あるいは、これは私の仮置きですので、御自分の発言がここではないとか。

山崎委員：先ほどのページとこのページと両方がぶってくる内容になるのですが、誤解がないようにもう1回整理しようと思ったので。地域でトップバッターで走っている大人との場をつくるというのは確かにいいことなのですが、僕が1つ変えなきゃいけないと思っているのは、例えば僕も行ったことありますけれど、学校で体育館

に全員呼ばれて聞きたくもないのに聞くという強制の環境を変えなきゃいけないと
思っているのです。キャリア教育って、先ほども言ったように自発性とか自分で決断して
決めていくということ、決めなかったことによるリスクに自分で後で気づくとか、恐ら
くメリットもリスクも含めてすごく大事なので。例えば、大学みたいに必修と選択があ
ってもいいと思うのですけれど、まずはその決めるということに向き合っ
てあげる。そのときにもし出ないと決めた子に関しては、何で出なかったのかとい
うところに向き合うのが一番キャリア教育だと思っているので。学年で皆、同じ様に
動くということは人間として多分ないと思うのですよね。皆、それぞれいろいろな
成長段階があると思っていますので、できる、できない、学校の先生のその難
しい部分は、今置いて話してはいますが、できれば、そこに向き合っ
てあげて、そういう講演をしたときに聞いて終わりではなく、もう1個また選
択ができるように。例えば、先ほどの金城先生もそうですけれど、あの人のあ
そこに行きたいとか、それが県外だとしたら県外に行きたいということ
を学校として評価してあげられるような仕組みが、テストの点数以外に出てく
ると、もうちょっと幅とか厚みのある人間育成ができるのじゃないかなと思っ
ています。ひいては、沖縄が受験向けの人材育成ではなく、本当に沖縄は人間
の中身、人と心がすごいと思っ
ているので、その価値が現場教育とマッチしてきたときに移住者がもっと増
えるのじゃないかなと。増やしていいかどうかは置いておいてですが。結構、
移住される方とお付き合いがあるので、学校の教育ですごく心配されて移住
をやめる方が結構多いのですね。でも沖縄に特徴のある人材育成が公教育
でできると、もっと世界とかいろいろなところから多種多様な人材が子供
と一緒に連れて来るとい
うことが、多分出てくるのじゃないかなと思っ
ているので、何か特色ある人材育成が公教育でできないかなとず
っと思っています。

宮平委員長：修正の部分に、自発性を優先して強制はしない、ということですね。

(※会議資料 p.8 項目 Modify「修正できないか」へ加筆)

次、拡大に移りますかね。拡大のほうで、興味関心を持った事柄についてはサポ
ートする体制を構築する、ですね。

(※会議資料 p.8 項目 Magnify「拡大できないか」へ加筆)

それで、今のお話だと結合できないかということですね。公教育と特色ある
人材育成が結合できないか。

山崎委員：結果として、地域人材に厚みが出るのじゃないかなと。

宮平委員長：矢印で、地域人材の厚み、そしてこの厚みが人を招くよ
うな地域、人を招くような地域力でもいいし、人を招くような魅力的な地
域にしましょうか。地域へつながっていくわけですね。

(※会議資料 p.8 項目 Combine「結合できないか」へ加筆)

今の発言をまとめると、こういったところになると思うのですが、いかがですか、山崎さん。

山崎委員：はい。

宮平委員長：また後で見返したときに、ちょっと違うとなったら修正できますので。取りあえず、そういう形で書きたいと思います。では、他にどうぞ。

喜屋武委員：これは、もしかして前回のときに話が出れば良かったのかなと思ったのですけれど、離島のほうで3年ぐらい社会教育講座をやっているのですね。講師で地域創生塾というのをやっていて、20代から39歳までの方々向けの講義なのですが、よく出る話が、人材が少なくなって青年会の活動も地域の踊りも家業もと、たくさんの役割を担っていかなくちゃいけなくて、地域を支える活動に参加するのがしんどいという若者が増えてきたという話が出てきているのです。こういうのも、このフェーズで話し合う1つの課題として入れても大丈夫なのですか。

宮平委員長：はい、大丈夫ですよ。やはりこれは抱えている課題をどうやって解決しようかというところになりますので。そうすると、これは、どこだろうな。修正できないか。

喜屋武委員：最近、伝統文化の村踊りも、年齢の幅を40過ぎまでやらないと踊れないし、逆に、やるために他地域から人を呼ばなくちゃできないという問題がいろいろなところで出てきているので、地域を支えるという部分ですごく深刻な話だなと感じますね。

宮平委員長：まず人口減少によって人材が不足して、多くの役割が増えてきて負担を感じているということですね。

(※会議資料 p.8 項目 Modify「修正できないか」へ加筆)

ですからこれは問題解決して離島とか、そういったところに人材を招きいれないといけない、ということで先ほど山崎さんが仰ったような、人を招くような魅力的な地域とは何かというところにつながってくるのかなと思いますね。はい、他にどうぞ。

伊良皆委員：私、社会福祉協議会で働いていまして、この3つ目の地域社会を支える人材の育成という言葉を見たときにボランティアと民生委員、児童委員のことが真っ先に頭に思い浮かんだのですけれど。まずボランティアにつきましては、沖縄の各地域で、

本当にボランティア活動で地域を支えているのを見てきました。ただ、今、ボランティアさんの高齢化、固定化といって新しいメンバーがなかなか増えずに高齢化、固定化してしまっているという課題があるようです。また、例えば昭和の時代に立ち上げたボランティアグループの中心を担っていて当時は30代、40代だった方が、今御高齢、70代ぐらいになられてメンバーも減っていく中で活動を休止したりとかというような事例もあるようです。ただ本人達は地域社会を支えるというような大きな目標を常々意識しているとか、ボランティア活動をしているということよりも自分達が好きなことをやっているのだという認識の基に活動に取り組まれている部分があります。なので、前回会議の中で私が発言すべきだったところが漏れていたのですけれど、ボランティアの再評価と活動支援というキーワードで課題提起したかったのです。ボランティアに過度に負担を押し付けて、例えば行政がやるべきことをボランティアにお願いする。ボランティアが無償若しくは安い労働力として見られて、法的な責任まで負わないといけなくなると、本人達はとても苦しくて本来は自分が好きで始めた、好きなことをやりたいと集まってきたのに、こういったことまでやらないといけないというプレッシャーでどんどん人が離れてしまうということも起きるのかなと思っています。例えば災害が発生した場合、今、災害ボランティアセンターが立ち上がって、災害ボランティアが全国から駆けつけますけれど、ボランティアが集まらないから災害復興が遅れているのだと、ボランティアのせいにしてしまう風潮も最近ないとは言えないのです。ボランティアは飽くまで地域社会を豊かにする存在でありまして、大きな責任を伴って活動しているわけではないのかなと。活動支援というキーワードで申し上げましたけれど、本人達が活動しやすい環境を整えてあげて、様々な方々がこの地域の支え手、担い手として参画できるように、社会福祉協議会は住民の皆さんの参加を促進するという大きな使命がありますけれど、そばで見ている、ボランティアの再評価と今後の活動支援について、会議の中で少し議論できればなと思っています。地域の社会を支えて、もう既に支えている方々がたくさんいるという点に着目して、こういった活動があつて地域が豊かになっているのだということを、県民の皆さんにもたくさん知ってもらって、これに私達も一緒に加わりたいというような方向に、人が育っていってくればいいのかと思います。ちょっとまとまりのない話で申し訳ございません。

宮平委員長：伊良皆さん、もう1つ。民生委員の話をお願いします。

伊良皆委員：そうですね。民生委員、児童委員につきましては、実は、充足率といいまして、定員に対する現時点の民生委員の委嘱数の割合なのですが、沖縄県は今、8割程度で全国でも最下位に近い位置だというふうに聞いております。民生委員のなり手不足につきましては様々な要因があると思ひまして、これは県の福祉部局のほうでも充足に向けて取り組んでいらっしゃるのですけれど、先ほど申し上げたように民生委員、

児童委員の皆さん、責任感が強いので、様々な地域の福祉課題に接するに当たって、自分も何とかしなきゃというところに大きなプレッシャーがあったりとか、様々な役割を兼ねて担っていかないといけないというところで、重荷という形で感じてしまい、なかなか活動を継続できなかったという方も、中にはいらっしゃると思います。ですので、民生委員、児童委員 1 人で抱え込むのではなく、協議会といたしまして、民生委員、児童委員のグループがあるのですけれど、そういった皆さんと一緒に課題を共有しながら、取り組んでいくという方向が今後は必要になってくるのではないかなと思っています。今、県の福祉行政のほうでも、この点につきましてはしっかりと取り組んでいるところですので、その点は付け加えさせていただきたいと思っています。すみません、以上です。

宮平委員長：ありがとうございます。では、ここは修正のところに、ちょっと入れておきましょうか。ここを、住民参画にしましょうか。住民参画の在り方の再評価にしましょうか。これでやると、今言った話が包含できるのかなと思います。

(※会議資料 p.8 項目 Modify「修正できないか」へ加筆)

すみません。時間が 5 時までで、あとお 1 人だけ、御発言賜りたいと思います。どなたか、いらっしゃいませんか。すみません、私の不手際でこんな時間になってしまいました。

取りあえず、たくさん出たのでこういうふうにとまとめさせていただいて、またお送りして、もっと付け加えたいとか、こんなことはこの中で言い足りなかったというのがあれば、事務局のほうにメールいただいて、その内容を我々のほうで仮置きして、また皆さんのほうにお送りいたします。そして出た内容を、またまとめて解決策であるとか、これに更に具体例であるとか、解決策のモデルケースとかがあれば、どんどん付け加えていってお示ししたいと考えております。そういうようなことを考えておりますので、取りあえず今日はこういう形で意見出しの第 2 段階でやっております。更に御覧になっていただいて、ここはもっと言いたい、ここはこう修正すべきだということも賜りますので、また次回までに整理して送りたいと思います。取りあえず、意見交換会はこれで終了いたしまして、事務局のほうから次の日程についての報告をよろしく願います。

＜事務連絡＞

事務局：宮平委員長並びに委員の皆様、熱心に御議論いただきまして誠にありがとうございました。最後に、事務連絡のほうをさせていただきます。

(※会議資料 p.10 表示)

先だって皆様に 10 月から 12 月という長いスパンで第 3 回、第 4 回の日程調整をさせていただきました。その結果、大体この時期が、全員参加というよりは参加できる方が多いということで、こちらに固定させていただきたいと思います。第 3 回は 10 月 28 日水曜日 15 時から 17 時、それから第 4 回は 11 月 13 日金曜日 15 時から 17 時ということで、勝手ながらこれでフィックスさせていただきたいと思います。当面、オンライン会議での開催を予定しておりますけれど、場合によっては対面での会議に変更することも考えられます。その際には改めて連絡いたしますので、よろしく願いいたします。それから、今日は 9 月 7 日ですから、次回の会議まで大分間が空きますので、会議前にも、今後 2 週間ごとをおおよその目処としまして、まとまった資料を提出して意見聴取を求めたいと思います。その際に、またこちらに御提供いただける資料等がありましたら、適宜送っていただけたらと思っております。以上でございます。本日は、長い時間、熱心に御審議いただきまして誠にありがとうございました。お疲れさまでした。

宮平委員長：どうもありがとうございました。

委員の皆様：ありがとうございました。

以上